

日露作家会議〈モスクワ—東京 2001〉記録

亀山郁夫（国際交流委員，東京外国語大学）

2001年10月26日～27日の両日，東京大学・本郷キャンパスにて，国際シンポジウム「日露作家会議」が催された。東京大学及びロシア東欧研究連絡委員会の主催，国際交流基金による助成，日本ロシア文学会・国際交流委員会の後援によって実現した催し物である。この「会議」が開かれるにあたっては，過去に次のような経緯があったことを紹介しておこう。同じ2001年3月，やはり国際交流基金の助成により，同じ趣旨の「会議」がモスクワで催され，日本側からは島田雅彦，多和田葉子，沼野充義，山田詠美の4氏，ロシア側からはボリス・アクーニン，ウラジーミル・ソローキン，タチヤーナ・トルスタヤら，いずれも現代のロシア文学を代表する3氏の作家が参加した（詳しくは「早稲田文学」2001年9月号を参照のこと）。今回の「会議」はまさにその余勢を買って実現するにいたったもので，ロシア側からは新たに作家ヴィクトル・ペレーヴィン，詩人セルゲイ・ガンドレフスキー，批評家ヴァチェスラフ・クールツィンの3氏が加わった。半世紀に一度あるかないかのこの大イベントについては，新潟大学での秋の全国大会の際にもアナウンスされ，「会議」終了後は，テレビ，新聞，雑誌でも広く報道・紹介されたので，ご記憶の方も多いただろう。最初にまず2日間のプログラムを記しておく。

〈10月26日〉・現代ロシア文学セミナー

- 1 作家ウラジーミル・ソローキンを囲んで
「ロマンは死んだのか？—小説の限界」
司会：望月哲男（北海道大学）
コメンテーター：亀山郁夫（東京外国語大学）
- 2 批評家ヴァチェスラフ・クールツィンを囲んで
「ポストモダニズムの彼方へ—ロシア文化はどこへ向かうのか？」
司会：貝澤哉（早稲田大学）
コメンテーター：中村唯史（山形大学）
- 3 作家タチヤーナ・トルスタヤを囲んで
「夢想家からミュタントへ—現代小説の新たな地平」
司会：沼野恭子（東京外国語大学）
コメンテーター：吉岡ゆき（東京外国語大学），今田和美（東京大学大学院）

- 4 作家ヴィクトル・ペレーヴィンを囲んで
「ペレーヴィンは〈第9の夢〉を見るか？—文化の真空に抗して」

司会：沼野充義（東京大学）

コメンテーター：望月哲男（北海道大学）

〈10月27日〉・国際シンポジウム

—新しい千年紀の文学に向けて—

第1部 現代世界と小説の可能性

司会：亀山郁夫（東京外国語大学）

パネリスト：タチヤーナ・トルスタヤ，ウラジーミル・ソローキン，ヴィクトル・ペレーヴィン，藤井省三（東京大学），柴田元幸（東京大学）

第2部 街の言葉と詩の言葉—大衆文化の時代と文学

司会：沼野充義（東京大学）

パネリスト：ボリス・アクーニン，セルゲイ・ガンドレフスキー，ヴァチェスラフ・クールツィン，島田雅彦（作家），三浦雅士（批評家）

・総括討論

第1日目の「現代ロシア文学セミナー」には，定員30名の会場に予約をはるかに越える50～70名が詰めかけ，聴衆の関心の高さを窺わせたが，翌日のシンポジウムはさらに，常時100名が会場を埋め，総括討論もふくめて，熱気をはらんだ議論が展開した。聴衆のなかには，この「会議」のためにわざわざアメリカや韓国から来日した研究者もあり，国際的関心の広がり示すものだった。計12時間余りにおよぶ議論の内容については，紙幅の都合もあり，逐一紹介することができないため，本稿の最後に，新聞，雑誌等での反響，報告などの記事一覧をまとめて載せておく。興味のある方はぜひともそれらをご一読頂きたい。ここでは，実行委員の一人としていくつかの慎ましい印象を述べるに留めよう。

私にとって今回のシンポジウムは，何よりも，ロシアの詩人，作家，批評家たちの，なまの声と出会えたという素朴な喜びにつきるものだった。ロシア文学，ロシア文化論を研究し，大学の教室などで講じながら，現実に彼らのなまの声に接する機会というのは，本国

ロシアでもなかなか訪れないし、そもそも、自分たちの研究対象である詩人、作家たちの声に触れる経験をほとんどもったことがない。そうしたレベルで考えると、今回の「会議」は、言ってみれば、グローバル化時代におけるロシア文学研究の新たな幕開けを予告する画期的な事件であったということが出来る。インターネットの普及によって私たちは瞬時にして世界の情報にアクセスできるが、生の声を聞き、生の姿を見るには、〈越境〉という原始的な行為を伴わずしては実現しえない。そして、作家、詩人、批評家の声と身体を思い浮かべることが可能となったいま、現代ロシア文学の研究は、従来とは異なった言説の地平を開くことになるだろうと私は考える。私自身、これまで主に〈評伝〉というかたちでロシア文学の研究に関わってきたが、対象とした詩人、たとえばフレーブニコフやマヤコフスキーをどれほど等身大の存在として経験したいと願ってきたことか。マヤコフスキーのアイロニーと人間的なぬくもりの同居を一個の身体的有機性のうちにどれほど感じとりたかったことか。その意味で、この2日間、本郷キャンパスで共有できた時間は、今後、伝記研究どころか、テキスト分析の方向性にも大きな影響を与えることになるのではないかと考える。「20世紀ロシア文学のモンスター」の異名からおよそ想像できぬひ弱な語り口、ブルガーコフばりに時空を超えた壮大なロマンの世界とボクサーを思わせる敏捷な反射神経の驚くべきコントラスト、厳しい批評眼の奥にきらめくアジア的なぬくもり、堂々たる体躯からつむぎ出される、奇想天外なイメージ群。「ポストモダン」のイメージからはるか隔たった「野蛮な」シベリア魂、その端正な風貌からは想像できぬ、時に偏狭と思わせるむきだしの反抗心……。テキストを通して得る印象と人間像との、みごとにまでの断絶は、今後の私たちの研究に、一種のスフィンクスのような謎かけを強いるとともに、私たちはむしろそれらの呪縛から逃れるため、さらにテキストの深層へ入りこむ作業に向かっていくことだろう。

代表世話人として献身的な努力を惜しまれなかった沼野充義氏は、「無謀にも近い〈事業〉」とこの「会議」を呼んだ。言い換えるなら、それはまさに嵐だった。ここに生じた嵐が、コップの中の嵐に過ぎなかったかどうかを見極めるには、それこそ10年の時が必要となるかもしれない。与えられた機会は生かさなくてはならない。スフィンクスたちの問いかけに答えなくてはならない。

最後に、今回の「会議」の実現にあたって努力された方々にお礼を申し述べたいと思う。資料作りから

ヴィザの手配まで煩雑な労を引き受けて下さった沼野充義氏はじめ、現地での交渉にあたってくれた毛利久美さんほか、裏方として準備に関わってくれた東京大学の大学院生、東外大、早稲田大学の学生、そしてだれよりもこの「会議」の実質的な「エンジン」であった同時通訳のお二人、吉岡ゆき、三浦みどりさんのご苦勞に心から感謝の念を捧げたい。また、日本側からパネラーとして快く加わってくださった上述の作家島田雅彦氏、批評家三浦雅士氏、さらにお二人の高名な文学研究者、藤井省三、柴田元幸氏にもお礼の言葉を伝えたい。

このシンポジウムについて情報を得たいとお思いの方は、次に掲げる記事やエッセーにアクセスされることを切に望みたい。

〈新聞記事〉

- Известия ru «Пелевин-сан произнес слова», http://www.izvestia.ru/culture/article_8637
- 日本経済新聞 2001年11月3日朝刊「ロシア文学新世代台頭」
- 毎日新聞 2001年11月9日夕刊「ロシア文学の現状、幅広く」
- 朝日新聞 2001年11月15日朝刊「ひと ポリス・アクーニンさん」
- 読売新聞 2001年11月27日夕刊「談論風発、日露の作家」

〈雑誌記事等〉

- Вячеслав Курицын. Курицын-weekly от 2 ноября. Русский журнал Круг чтения. Новости (<http://www.rus.ru/krug/news/20011101.html>) (ヴァチエスラフ・クーリツィン『クーリツィン・ウィークリー』2001年11月2日(ロシア語, インターネット))
- 毛利久美「別世界への鍵」『ユリイカ』2001年12月号
- 貝澤哉「日露作家会議に参加して」『窓』2001年12月(119号)
- 柴田元幸「たまには国際交流」『新潮』2002年1月号
- 正村和子「日露作家会議を聞いて」『ロシア語通訳協会会報』2002年1月10日(No.34)
- 三浦みどり「日露作家会議で通訳して」(同上)
- タチヤーナ・トルスタヤ「新しい惑星に読者を」(インタビュー, 聞き手沼野恭子)『NHK テレビロシア語会話』2002年2・3月号
- シンポジウム「街の言葉と詩の言葉」『早稲田大学』2002年3月号